

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 5



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまった北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇一三年五月号（通巻七八〇号）

中村里美

■遊覧寄港〈解放〉

◇今月の二十首詠……一語

松永智子 2

玉井綾子

47 46

■歌壇月旦
篠弘の功績

■作品A

奥田陽子・小野雅子他

石澤利夫他 4

A C B A

石田安子他 50
猪狩ユミ子他 60
辰巳洋子他 38 74

秋山裕子・阿藤たつる他 16

■三月号作品批評
◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子

A 田土成彦・野玉幸
茂木斌・近藤栄昭
B 大寺智子・山崎昭子
C 伊東ミイ子
オリーブ集・仲西正子

66 48

◇今月の二人

関根正明・森田泰子

私と短歌との出会い (249)

遠藤義子 19

◇今月の二人・作品評

久我田鶴子
〔編集部〕

■磯田ひさ子歌集『ヒヤシンス』批評

平山公一 34

最近の歌誌より

〔編集部〕

優しく強く
北極星光る

忍足ユミ 34

創刊70周年記念 地中海全国大会（浜松大会）ご案内

87 86 18

■第一歌集を読む 2

44

クリップ……88
神田通信……表3

（表紙）ザイン）Tatsu Goto Design

市原志郎歌集『ひよどりの風景』
—匂い立つ抒情—

もとむらしげと

99

一語

松永 智子

一九二九年生まれ。

音風グループ所属。

第一歌集『黒ゆりの歌』、

第六歌集『川の音』、

エッセイ集『ことばと出合つ』等。

糸杉の木末をはなれ空へ飛ぶ青き螢火ひとり見て立つ

庭の木に螢火放ちうから寄り語りし日がありとほき日の影

かやを吊り螢を放ちたかぶりて螢見し夜半ちちははの声

かなしみて言ひしことばにかなしみてかへる声なく螢火の飛ぶ

夜毎さめ見るとなく見る玄関の闇の一隅螢火ひとつ

長かりし九十三年ふりむきて飛び交ふふたつの螢火を見る

人の声とほくにあるを聞きながら交はすことばのあらず螢火

ふりむけばいまにあたらし父の正座ははの笑顔おとうとの声

手のとどくものにあらねば立ちあがり見てをり燃えつつ沈む日輪
音のなき十階ビルの六階にきくとなくきくこの闇の音

見るとなく見る夜半の闇螢の火ひとつともらずなりしままなり
あかときの闇をつんざくパトロールカー 音消えのちの音のなき闇
昇降機の音途絶えたり出勤の人らのあとに人の声なく

手を合はせ甘えじころのつづきなることばつむきて閉づる仏壇
生きて来しいのちおほかたひとりにていま闇に聞く雪のふる音
白き壁白き天井そのもとの闇にさめ聞くとほき日の声

ひたすらの看取りなつかしとほくして音なき闇にいまひとり臥す
ひとの声逝きし日のまま聞こえるて「飛翔」の一語いまにあたらし
亡き人のことばさながら螢の火夜をとほしとめる闇の一隅

一世かけひとのことば「飛翔」 その一語に見られつつ來し

作品

A

奥田陽子

雪残る

・羊

体動かぬ寒さというを知りし朝その地に初めての冬を迎える
桜木の枝のかたちに雪を置き川辺に立てりやまず降りくる
ようやくに雪やむ夕べ円形に雪をのこして外灯にじむ
キシキシと新雪を踏みあゆみたり今宵ははやく点る外灯
雪やみて風の冷たさしだいにも増す足あとの大を吹く
玄関の積雪寄せし雪だるまの少年に似たる微笑み
公園の枯草のいろ暖かき傾りに雪の消えのこりいる

小野雅子

玉子

・羊

目玉焼ひとつ焼くのちやうどよい鍋をもらひぬ子よりのお下がり
はつ春に卵ひとつを焼いてみる黄身あざやかに白身に浮かぶ
鮮やかに黄身の焼けたる目玉焼このみし茂樹とほき若き日
あまりにも細くなりたるわが髪の落ちてゐるのを見つめて拾ふ
年齢のせむか寒さのゆゑか指先が割れて伊予柑むくとき痛む
暖房の温度を上ぐるほどでなくストール一枚羽織りもの書く
カシミヤの布一枚のあたたかさウクライナ人の日頃とおもふ

磯田ひさ子

見せ消ち

・森

あからひく錆の浮きたる池の面を揺らす風あり水の皴^{くぬ}生る
投げ入れしわび助一枝つきつきにくれなる点し寒を動かす
「梅起し」の雨のあしたは競ふごと真綿のやうな白き梅咲く
佐太郎より格の高さは文明に傾くと玉城徹つぶやきし
世に多き歌人あれど茂吉こそ最たる歌人と遙空言ひしとぞ
見せ消ちの跡ありありと残りたる写本に人のこころ漂ふ
わが歌稿しるすノートにをさなは見せ消ち見せ消ちと囁したてたり

市原やよひ

米寿

・萬

君に触れ米寿祝うは許されじコロナが奪う一つの願い
共に居て夫の米寿祝わんと子、孫集うリモート画面
思い乗せ大き花束さし出だす画面に夫の笑顔のありて
映りたる夫と呼吸を合わせつつローソクを消すハッピーバースディ
十五分の拍手と歌に終わりたる画面越しなる夫の米寿
空き畑に春の光の満ち満ちて大犬ふぐりの青き絨毯
公園に樹形整う道ありてメタセコイアは少し目覚めし

梅本武義

産廃回収

・羊

上林節江

冬の栗駒山

・鷗

産廃の回収言うや鉄屑をさがし出す早さただものでなし
下見して来たのか産廃回収に家の裏まで覗かんとする
「猪の防御に使う」我を避け妻に話をを急ぎ割り込む
一人住む孫が気になる間バイト老いのテレビの見過ぎと言うが
親の名を聞き合点する自治会に初めて見たる不快な男
ミヤンマーの市民に暴力ふるう兵思えてならず親も兵士と
ブーチンが演じてくれる大本営発表などの日本の歴史

大浪美雪 水仙

・森

あけましてコロナ三年房総をマスクはづして水仙の道
浮世絵に「元名の水仙」と描かれし水仙の道令和に続く
大型のバスの見えざる水仙ロードひとりふたりと途切れときれに
埋もれるに飽きしか大根葉を広げ伸ばせる首を緑に染めて
鉢巻に身を引き締める白菜の外葉は汚れ枯れ色も見ゆ
九十九折のなだりなだりと埋め尽くす日本水仙逆光に透く
老い一人シャベルに足かけ一掬ひ一掬ひづつ棚田起こせり

神田鈴子 シンビジュム

・大

庭園に置き忘れるしシンビジュムの鉢に見つけぬ五つの花芽
シンビジュムの芽吹ける今もこの空のかなたに戦の絶えぬ國あり
五万の命奪ひし地震あり避けらるる筈の戦に命消えゆく
部屋裡と外の気温差に戸惑ふやシンビジュムの花芽緊まり
ぐんぐんと日毎伸びゆくシンビジュム若草色の花芽ま直ぐに
白き薔薇のややにふくらむシンビジュム花開く日をひたすらに待つ
ひそやかに如月の夜を積もりたりわが日に清し真白き世界

北山雪男

朝明けの月

・伊

他人様のお持ちのものは持てぬ性 例へばスマホ、世渡りの術
A Iと語る言葉のあらざればわれに吹くことなき明日の風
〈新しき戦前〉なる語暗澹と 夜、新聞の隅に知りたり
戦車群の砲撃聞きし日のありき演習とはいへ肚にすしんと
目を瞑り楽しむ平和球春の到来告ぐるラジオに暫し
引き返す道あるものと思ひたし手に入れし業海馬より棄て
かかる世に何の未練もなく老いて翳む眼に見る朝明けの月

丈を越す雪の回廊さぞかしとときめく先に白き山見ゆ
ふるさとの栗駒山をふかく来て除雪の途切れ睫毛の凍る
きさらぎの山荘の朝地吹雪の腕に水柱はくの字に曲がる
滝のこと窓に水柱は貼りつきて水細工のなかに起き臥す
直撃のあれば命はからんと槍とも光る水柱を見上ぐ
はからずも晴れの冬山刃のごとき水柱に五彩の光のやどる
スタッフと心安くも長話ねじりほんによに杳き日還る

菊地栄子

長生きの人

・海

草刈十郎 おでん酒

・世

小林能子 天の采配無きや

・羊

ワクチンへ重ね着の腕しばり出す工夫あれこれ待合室に
あばらやの歌か嘆きか隙間風昨今嘆くことばかりなり
正論の愚論となりて止まれるところ知らざるおでん酒かな
湯たんぽの湯で顔洗ひしことあまた失はれたる昭和の美德
熱爛の五臓六腑を駆けめぐり言はずともよきこと口に出す
一声で笑顔の浮かぶ初電話いい年となる気分するなり
初雀庭に群れるて着ぶくれし戦火の語り部白寿となれり

國井節子 紅白梅図

・春

人はみな過去を背負ひて旅をするかく遠くきてふり向けば過去
梅林の古木けなげに花をつけさながら光琳の紅白梅図
雨もやう伊豆の二月に早や咲ける河津桜の花のとまどひ
人生はゴールの見えぬマラソンぞ老いの坂道ころばぬやうに
年輪を重ねるほどに味を増す三年前の梅酒の封を切る
不意にくる胸ぐるしさに利く薬、持つてただで心安まる
海底に生くる命の立つる音トロ箱を蹴る蟹の爪先

河野繁子 信頼

・雁

娘の家族となりに住めばかつての日湯浴みさせたる孫らに頼る
それぞれが考えを寄せ取り付けし手摺まつすぐ老いを歩ます

濁流を松永さんと逃げる夢覚めてもなぜか諭しさ残る
信頼は温もりなりし明け方の三時に目覚めぬくきを知りぬ
され違い逝きたる人も温もりを賜いしも消え九十年生く
地球より遠ざかる月一年に三十八ミリと計算せひと
何万年いや億年後人あらば星の一つと月を仰がん

コロナ禍につづくロシアのウクライナ侵攻を憂ふ友はドイツにて
ロシア上空飛行禁止に迂回ルート運賃高騰も帰国阻むか
世界中まきこむウクライナ侵攻を收むる天の采配なきや
リハビリの明け暮れに友の三年ぶり里帰りの知らせはBKKより
団地のはづれ雜木の枝を仰ぐとき狭き視界にリスを捉へつ
肯空を背にし枝から枝に飛ぶリスを見てをり杖に槌りつつ
バスの窓に一瞬夕日の房総が見ゆる海へとつづく坂道

近藤栄昭 北前船

・虹

北海道新幹線は駅飛ばし海峡潜り木古内に上がる
千代の山千代の富士の出身地轍はためく津軽海峡
沖に島つがるの富士は動かすに離さすにいる松前行きを
北前船を筋いし石柱波かぶり白く跳ねいる晩夏のしぶき
北前船終着点の松前港暖流届き海は透きいる
小さくも聳え立ちいる松前城アイヌ脅しのシンボル残る
船に乗り身欠きニシンは日本海ニシン漬けへと阿賀川のぼる

近藤芳仙 戰争

・信

神紋は菊に桜の大鳥居 護国神社へ足踏み入れる

出征の兵士おくりし御社にけふ鎮魂のラッパが響く
神主の祝詞の意味をさぐりつ「遺族会」なる席にゐならぶ
幾そ度この御社ゆ発つ亡父か「お国のため」は吾がためならず
あたらしき世紀におきる戦争を誰か想はむブーチンのそを
街も家も壊されつづけ真裸となりし国土が日日報ぜらる
一年になんなんとする侵略の終はり見えざる冬ウクライナ

坂上直美

春の聲音

・天

目を閉じて耳を澄ませばどこからか春の聲音のかすかに聞こゆ
如月の街を彷徨うわがめぐり春は来れり聲音しづかに
ふと見れば満月われを見ておりぬ彼方の君の氣遣いなるか
わが夫よ今年も君の望みなる甘きゴディバのチョコを供えん
如月の空の彼方の青の色かすかに春の浮かびいでたり
春の鳥啼け声高く妻を呼べ空にはるけく青は広がる
せめてもと色紙を雑にとりかかる老女ひとりのしづかな暮らし

坂出裕子

あられ

・洛

大粒の霰が土の上を跳ね転がりしまま溶くるともなし
真つ白に視界を染めて山も木も土もひたすら雪に覆はれ
閉ざされて閉ぢ込まれて生きてゐるやうな気がするコロナ禍の日は
外つ国の子との電話にコロナ禍をしばし忘れてこころやすらふ
北国ゆ渡り来たりし鳥ならむ光の中に水浴びしをり
水道をポタポタ出しておくと良い大雪の夜の娘からの電話
鉄橋を渡る列車の音遠く消えゆき夜のじま深まる

佐藤道子

病棟

・甲

高台の病棟六階雲の傍光る峯々空の果てまで
真白きライオンの雲風に乗り冬のさ中に東を目指す
病棟の掃除のをばさんきびきと話題豊富でひと時楽し
リハビリ師さん椅子持ち私について来る廊下のどこでも座れる様に
百米歩みて今日はここまでと笑顔で話してさよならをする
千星さん貴重な名前の友達入院中の幸ひひとつ
看護師さん幾人お世話になりながらマスクに眼鏡覚えることなく

篠原まり子

春を待つ

・羊

頼朝の墓のめぐりを散歩する赤いマフラーの養老先生
手のひらに動かぬ虫は冬眠中元の繁みに戻す先生
特殊詐欺トルコの大地震読み終えて溜め息深く聴む新聞
血圧の薬ひと粒転がりて小鳥と取り合う小さな事件
鉢植えに群れて広がるひよこ草小鳥の国で小鳥は遊ぶ
「ラーゲリー」その周辺で生きていた幼き日々の記憶は非ず
老い深く夏ばてあれば冬ばてもひたすらに待つ春の訪れ

柴田登志恵

あくがれ

・天

このところ背黒鷗を見ざりしが恋にあくがれ旅立つならむ
争ひの國に尽くるも思ひつつ背黒鷗は北へ向かひぬ
めかくしの鬼さんこちら泡雪は地に帰られず消えゆくばかり
くつきりと月はそく輝る明け前のわたみの空にうすべにひろがる
泡雪ときらめく日差しに揺れ揺るる葦辺をたゆたふ仮寝の鶴群れ
朝焼けは山から街へくだりきてうすぐれなるに野梅かがやく
ほんのりとあかるき梅の咲くあたり目白のつがひ来らずらしマスク來

須川千恵香

雪の景

・眉

雪渓を葉巻しながら流し交ひ立山連峰黒部湖に映ゆ
室堂は十九米の雪の壁抜けて車窓に幹埋まる木樹
我がさ庭去年の大雪九極何十年ぶりとて騒ぎし四国
剪定を終へたる庭木樹形よく葉組みの種に雪を受けゐる
雪の傘松刺を 実は万両 山茶花花を抱き隠さむ
母引きしさつま芋蔓たぐる度五片の薄紅葉群れを滑る
空の色鳥の鳴き声幼日の大気に浸り人影を追ふ

鈴木結志

会津魂

・福

高尾恭子

年のはじめ

・大

七層の天守をささうる石垣に秘むる領民の賦役がこもる
会津戦争中でも頼母一族の娘を刺しし母の自刃に涙流るる
「ならぬものはならぬ」会津士魂の少年兵婦女子の殉死涙にしのぶ
初陣に破れれば会津娘子隊の恥と竹子の烈烈たる言葉
忠誠心自刃に果てし白虎隊しのび香炷き涙をこらう

会津六百年物語り鶴ヶ城の皆殺し異仕掛けまで秘む

「会津の美」扉の文字はわが書なり「歴史春秋」と永久に息づけ

閔根榮子

雪玉

・埼

これもまた用事のごとく夕刊をポストより取ればひと日終るか
もう読めぬ活字小さき本を振りしばらく積みたるままの部屋隅
雪少し積もり土を掘り下げて去年に貯蔵の大根を抜く
たわむれに雪玉作りて投げたればすぐにくだけて相手はいない
笑うこと少なくなりし日常か表情筋も退化するとう
この冬の寒さきびしくクリスマスローズといえど咲く一月尽
使わざりしバッグよりハンカチ出できたり五年も前わが手触れしよ

閔根和美

雨水の祝宴

・埼

祝宴へ向かうに迷える道すじに聖歌もれきて招き入れらる
今日のミサ与れざると覚悟せし身に奇しきも御堂の待てり
聖母像まえに祈りを捧げいる身じろがぬまま肌くろきひと
たけたかきパイオルガンおこそかに響きひろがりわれをつつみぬ
コロナ禍のゆるみ大安吉日の雨水の宴にひとのあふるる
一步一步遠のき他家のひとなる姪はましろきベールをひきて
誓うべき神より好みのファッショニに挙げる式とぞ届託のなき

高津砂千子

芍薬

・風

天上の母に声出し語りかく思いあぐねしことありせば
ほほえみて応うるのみの母上に脂ぎてゆくかなわが胸裡の
そここに芽を出す芍薬指さして教えくれたる若き日の母
着物着て参観日に来し母上にうれしさ隠せぬ小学時代
四十歳にて母を送りしわれなりき末っ子ゆえの早き別れぞ
しだれ梅一氣に開きミツバチのせわし気に来る雑まつりの朝
古着出しバサリバサリと切りてゆく新しきわれ現われくるや

滝田靖子

斗南

・新

息白き厨に米を研いでゐる斗南の残酷にぞつとしながら
寒さゆゑ命を落とす残酷を罰とし与ふる冷酷のあり
今日君の命日だつた今日わたしの誕生日だつた二月また雪
とりあへず腹式呼吸なにゆゑに眠れぬ夜のわたしのために
四十年ぶりに戻りし故郷は寒いなど言ふそんな薄着で
薬効に病の癒えしを自らの手柄のやうに報告してゐる
らふ梅も梅も桜も見に行かうわたしたちもう自由なんだから

竹下妙子

冬の朝

・霧

玉井綾子

鶴

・羊

見上ぐれば霧島山に生ふる杉穂並の列に霞ただよふ
夕日浴び茶褐色に輝ける杉の大樹の遂げゆくはやさし
艶める椿一樹の葉裏にも光とどかぬ明るさはある
冬枯れの木立の中にやぶ椿春を告げるてひたすら赤し
ひとひらの椿の落花拾ひあぐ女一人のひとすぢの道
背な曲り杖つき歩む吾が姿曲面鏡にひそと笑へり
佇めば身を吹き抜ける風ありて落葉ひとひら纏はりてゆく

田土成彦 霧

・宙

シクラメン真紅の花は吹き上がる朝日の当たる春の出窓に
安値から二番目選ぶミカンの棚初めて目ににする品種もありて
すきゅきはまぼろしだつたかも知れぬ街灯つむ霧流れゆき
計測は終はりましたと音が鳴り今日の体温六度三分と
DNAの変異が造る象の鼻人知の及ばぬ造形をなす
初孫が二十歳になるといふメールつまりわれらの若いふかみゆく
CO₂減らし植物の生きがたき世をつくるとか狂氣のさばる

田土才恵

切り岸のさと

・宙

夕風に誘はれながら散歩する流れる雲と今日を語らふ
潮入りの流れに乗りて水脈をひく小鴨一羽のいづくまでゆく
冬帽子に耳までかくし着ぶくれて日脚かたぶく草手をゆく
ゆくりなく想ひ出させる亡き父の調子はづれのゴンドラの歌
吊されて壁に影置くバラの紅二ヶ月の日脚すこしのびたり
腹に手を当てて大きく深呼吸息ととのへてヨガの始まる
仰向けの屍の形に十五分眼ひらけば此の世が見える

永田進一 上京

・山

きりぎしの果てなく続く日本海子取ろ子取らのうた思い出す
拉致されし少女のおもかげ切り岸のかなたの空に彷徨いつづく
海岸へ下る坂道千枚田うろこの形にひつじ田あおし
たどり着きし珠洲の朝の晴れ渡り日本海岸青き風吹く
塩作りを嘗み生きし人々の幻見えてきりぎしの坂
急坂を塩担ぐ影まぼろしに見え隠れして珠洲の海岸
塩焼きの小屋の煙のたち登る近き過去世の現見えくる

新しき世界を創る半導体開発競争夢を賭けおり
乾杯す帝国ホテル地下一階マスク姿は少し哀しく
世田谷の細き道行く路地に建つ坂入印舗の看板の見ゆ
線香の煙に君は笑顔見せ遺影の眼差しわれを見つめる
訪ね行く地中海本社は神田にありスマートに立つカトランビルは
雪池忌の供花の残り香墓前に額すきしばし祈りを捧ぐ
久しぶりバレンタインのチョコの香よ君の笑顔に心華やぐ

ストレートパーマとれば譲らない髪となり倦む仕事の朝を
ちゃんとする為にする縮毛矯正の頻度コロナ下で徐々に高まる
剛毛用シャンプーしかない旅先で変わらぬ猫っ毛指にからめる
ふんわり用・しつとり用のシャンプーを混せて明日の出たとこ勝負
一本の髪にふくらみとしばみあり毛根の吐きし五年を触れる
読みさしに落ちし黒髪そのままに次読む人に詫びつつ返す
洗髪を毎晩するは当たり前と言う子を風呂に入れる一苦勞

永塚節子 空

・銀

みぞれ降る通りにひとりわ輝くは春を呼ぶ色みもざの黄色
春には黄色の花がよく似合う冬の眼りを搖さぶるよう
しだれ梅の濃きくれないを仰ぎおり心の澄みて空になるまで
いつしらに紅の梅好みおり白がよろしと言ひしは若き日
時はめぐり桜ふたたび咲くと云うにウクライナ今も戦いの中
一人の狂氣のゆえに死にゆきし幾万人残されし人
どこまでも澄める青空腕のこと広がりゆけよウクライナまで

仲西正子 力

・沖

天牛の食らい付きたる洞あれとぼつぼつと咲く九年母の花
天牛にかじられ黄ばむ九年母の気魄にて咲く白の清しき
たわわなる実り望まぬ存える力を貯めよ庭の九年母
金婚を寿ぎくれしよおおらかな庭ひだまりの今年の桜
再びを「軍人節」を唄わすな夕陽しづかに海へ入りゆく
川向こう那覇より聞こゆ事始め「ミサイル避難訓練」に竦む
世世世一戦後は続々甘世なれ歌三線の絶ゆることなかれ

中村博子 同級生の電話

・漣

疏水の橋渡り校門くぐりし日今では遠くかすむ想い出
やや弱れる声の電話は同級生「千原さん」なり何年ぶりや
七十代流刺と生きしに八十に入りて意欲を失える友
八十二となりて弱れるうつし身に一人住む友自信なくせる
最期とはならん声をば聴かんとぞ千原さん「もう死にたい」の電話
「また電話するから死んだらアカンよ」と久しき友との受話器を置きぬ
死にたきと言いにし友へまず一枚手作り絵葉書に「がんばろうね」と
もしやきみ「二十余年來の事務局の集大成」となしたるらんか

西堤啓子 ポロネーズ

・天

憂鬱なシューーマンの像音楽も救えぬものがあるポロネーズ
積み残すことのあれこれ浮かんでは消えゆく一月 地にはだれ雪
三年ぶり友の笑顔がこぼれたらなべて明るむ 遠山は白
日当たりにうずくまる猫・自足して海からの風「おれに構うな」
みかん道たとれば海が広がってことなき世界 卵のうえの
自分の声が遠くて震えていた受け止めきれずこころつぶれて
なると巻のり巻だて巻やわた巻 首を巻く手はひやりとそこに

白子れい 雪の花

・洛

わが庭に屋根より落ちし雪積むも今日は立春 春たつ日なり
春立つもわが家の庭に積む雪のとけざるままなり明日を待たなん
ひと葉をも残さぬ桜の細き枝自由に伸びおり先に蕾を
あさ朝を見上ぐる桜の枝先の蕾少しく赤味おびくる
塞かれいる疏水に車の入りきて底にたまれる泥すべりゆく
細く伸びし桜の小枝に雪積みて雪の花咲く疏水のほとり
蕾いまだ小さき桜の並木みちこころ引きしめ一步一步を

ばばりようこ もしや きみ

・鹿

ひとつめは「ひまわり十色」のネーミング 千恵さんならではと喝采したり
ふたつめは「きょうこちゃん」の手腕 見開きの裝丁100%意をつくせりと
顧みて「十余年を尊びぬ 生者も死者もなべてよみがえり
今宵はも「き人らのうたしみじみと声に出しよむ しみじみとよむ
気がつけばあなたらの声も和しとよめける気配に満ちおり あの声 この声
千恵子さん貴女の企画ありがとう 生者も死者も一冊の中
もしやきみ「二十余年來の事務局の集大成」となしたるらんか

浜 谷 久 子 行 方

・地

藤 田 美 智 子 立 春

・新

積もる雪時間を閉ざす凍結日降らない土地が表情変える

籠もる日を静けさだけが降り積もる昨日明日に繋がらない今日

溺り水透かして和ます人のいて出会う縁の不思議を思う

両親を手厚く看取る幼なじみ二十年ぶりも変わらぬ眼差し

ゴミの量減る日々子らの速くなり簡単料理の二人の暮らしあは

身軽にはならぬ行方か身体の故障手間取る時間の間延び

何事も無かつたよう日を終えて眠りが明日へ細く統けば

檜垣 美保子 近未来

・昇

藤森 巳行

我が家を直撃

・銀

叫び声聞かねどすぱり切られたる桶の肩口あたりの小口

人の言「どこまで続くかかるみぞ」明るく返す「おわるまでです」

川の上にせりだし伸びるねむの木に炎黒く熟れ揺れつかわく

選ばれて宇宙飛行士となるふたり月にふたたび立つ近未来

ひとり住む島の親に一日も欠かさず声をとどけしがはは

半口のははの人間観察と婦人の首のターコイズブルー

終点の一つ手前の電停は人っ子一人居ぬ雨あがり

福田 庸子

当て布

・今

船田 清子

老いの幸ひ

・天

背を向けてパンを啄むひよどりの安らぎを我の安らぎとする

当て布に補修ステッチエプロンに母の過ぎし日さまざまとあり

気がつけば同じ話をくり返す我につき合ひくるる友あり

山の田のかつてありしを偲ばする土塊の中に水は光りて

福島より届く電力のつなぎしかも都市と地方の離れる今は

頂きのややにくだれる場所を得て送電線の太き電柱

文字と共に歴史も省略してゆくか中国政府の都合のままに

原発事故の責任誰も取らぬまま十二支一巡 兎が跳ねる
 〈処理水は安全〉といふテレビCMに海風びたりと止みて立春
 ふるさとに戻れぬままの死者もるむ福島民報の計報欄には
 避難者の声の小さくなりたるに乗じて再びの安全神話
 汚れたる土は福島に集めよと吹雪に混じり聞こえくる声
 積み雪を溶かせる雨に現れぬふくらみ増せるフレコンバッグ
 〈六十年超〉に反対せしはひとりなり されど一人のしを忘れず

本元由美子

戦争と平和

・岡

その昔つるかめ算を解きし日あり関孝和を『天地明察』で識る
雪閉ざす峠の郷にも春立ちぬ命を繋ぐステント入れらる
ウクライナにバルチサンなる女兵士ゐて『戦争は女の顔をしていない』
ウクライナのテレビに映る惨劇を沈黙としては為らず言葉探し
日常のまにまに浮かぶ想ひ汲む黄の立金花春昼を咲きぬ
春雪を戴く山を遠く見て一世清しき女であるたし
峠越えの雪に耀ふ星山の高峰に対ふ歌詠みになりたし

牧 雄彦

二月・沖縄

・大

いしぶみに彫られし死者の名二十四万平和公園の冬空の下
無辜の民また兵士らも眠りゆて空の青さに胸迫るあり
糸満の空も海面も青深しくさはとほき過去の歴史か
海からのそよ風の吹く普天間の基地雨去りてただに静けし
しかばねを越え逃げ惑ふ民草を描きし丸木位里俊の絵は
蟲音をはらまきて機は上昇す嘉手納の空はけふ雲低し
どこまでも続くフェンスの向かう側そこは日本で日本にあらず

松浦禎子

樹下美人

・羊

冬ごもりコロナ籠りに閉めきった部屋に空氣も言葉も淀む
庭の隅に一輪のみの月下美人純白という孤独いだきて
キャンプ張るヤクルトスワローズでご球場さんさん太陽さくら満開
麻痺のこる手にてボタンをはめる時貝のボタンは一回転する
汁碗に逃げまわるなめこ掬わんと箸持ち直す鳴き止まぬ蝉
感染者へりゆく様子見る画面茎のびのびとひまわりの咲く
そよろとも風の動かぬ日ぐれ時黄色の太陽海面にうかぶ

松本多摩子

風の子

・桜

寒いねと声かけあいて行く道に園児は駆ける風の子となり
水雨降る天気予報は底という信じて待つは春の温もり
樂しみに植えたる木々の数多あり文句の一つも亡夫に言いたし
剪定の終りしさ庭の清潔し亡夫の残せる庭を守りて
週二回六時に家路に着く頃は明るくなりて春待ちどおし
三重苦というトルコに地震あり百時間越えの奇跡もあるが
手作りの雛出すどれもうさき耳立支に限らず耳のかわいさ

三浦好博

アンタレス

・銚

お光さまの信仰のもとにMOA岡田茂吉の心根に寄る
海風ぎし今日の初島遠見してまだ生きている心浮き立つ
一山に財を投じて築かれし浮世を淨土につつむ館内
エスカレーターに登りつきたる大ドーム西欧の調べしづかに流る
光琳の工房を摸す歳がまえときにいで入るまぼろしのひと
うねりゆく金波の川面をなかに据え紅白梅の根元盤石
立ち姿紗千子さんに似る樹下美人嬪まろやかに千年を経つ

松瀬トヨ子

貝のボタン

・沖

浮遊する宇宙の我のレム睡眠振り回しる大熊座の尾
どつかりと座れる獅子座に見下るされ春の寝床に四肢をのばしぬ
美しい夢を思ひて眠らむか二十個の流星それぞれ數へ
アンタレスのルビーが光るしののめに大地震に遭ふため旅立ちし
三・一の朝に歟座アンタレス不気味に光れど吾は生き残る
みまかりし二人の恩師も照らしむる冬の星座が今我にふる
北の氣流ながれ来りて冷えまさる空曇かれて星座言ひ出す

三木まり 遥

・昂

御代田澄江

未来形

・茨

たましいが奏でる旋律すい星のひとつが軌道を外れて消えた
 たましいが抜けた身体は入れ物で煙と消える如月の空
 たましいは何処へ還りたいのだろう私は北へ、海へと還る
 ぬけがらの身体は白いけむりとなり如月の空を風とともに
 安穏な巣に戻りゆき眠る夜の窓の向こうに雪の気配が
 やわらかな光の珠が生まれ出る如月の空の遙かな向こう
 春ちかい柔らかな闇の庭隅にけものの家族がいのち育む

宮本靖彦

トルコ震災

・凌

露に勝利はた難破船救ひたる日本と親しトルコ旅ゆく
 散歩中の妻に花束くれし国トルコ大災胸つまり見つむ
 崩壊のビル街瓦礫の山高し戦災の大坂吾に還り来
 死者五万生くるも地獄テント住まひ岸田旗振れ国揚げ援助に
 首相見舞ひトルコ大使へ九億円GDP三位の日の丸しほむ
 東北災に台湾と孫氏それぞれに百億円見舞ひ早や忘れしや
 降り止みしあとも傘もち家を出る卒寿のボケ度験さむがとて

三好聖三

ひだまり

・伊

山際を行かねばならぬ道筋のやれやれ杉の花粉が見える
 検鳥が芝に集まる夕つかた車窓に飽かず見つめていたり
 陽のぬくみ溜め込むよう猫はいる日暮れに近き階段の上
 「効用」にもっとも遠い山野にて桜ちらばう黄葉ちらばう
 ファシズムの種はわれにもさやかな隣組にも芽生えるらしき
 鏡面の汚れを拭きて顔面の疣のでかさを確かめている
 束へと収斂してゆく網の雲、立ち小便の畠の上は

もとむらしげと

青嵐

・そ

父を刺す夢より覚めぬ青嵐の吹く夜は十五の少年となり
 すれば違う父と母との諍いに父の背を撲ち出でし夜あり
 軒下にうずくまりおれば玄関を開くる音して父が出で来ぬ
 我の背に丹前を置き「家に入れ」と短き言葉を父はかけゆく
 先物買入につまずきし父は長崎の工事現場に出稼ぎにゆく
 長崎より帰れる父が翌朝の出発と聞けば涙こみあぐ
 父の不在つづきて夏の田に播る麦菜帽子は草をとる母

元旦に久々に来し息子一家若葉マークの孫の運転
 久びさに逢ひたる孫は背の高く羽生結弦にさも似たりとは
 爽やかに語りかつ食す孫は明日箱根駅伝応援に行く
 箱根には婆も行きしと吾語る話は過去形孫は未來形
 正月に姉妹にて下ろしし新しき桐下駄なりき匂ひ懷かし
 桐葉の母に賜はるこの命冬の寒さの底ひわが誕生日
 今年も届く盛り花とバウムクーヘンと嫁に電話す息災なりと

茂木斌

江尻光一さん

・埼

きさらぎの始めに占ふわが運気五月までよしあと引き締めよ
 占ひの良きは信じて逆なれば読まぬことにし無、無、無と流す
 ドームにての世界ラン展見しもむかし江尻光一さん元気にゐたころ
 植ゑ替へし桜草の芽の出でしかと懐中電灯にそれを確かめき
 夜も遅く小さな緑のぞきしを勤めより帰りみるが楽しよ
 江尻さんも芽の出しころは懐中電灯手に夜も見しと書かれたるたりき
 江尻さん存命ならば令和五年九十七歳となられた筈なり

桃原佳子 目標

・沖

朝空に白い半月ぼんやりと訓練なかへりの飛び行く
強霜の昼の花壇のパンジーは色とりどりに花弁ひろぐ
元気かとコロナ禍を案じかからくる電話の声は確かに友なり
老いるほど生きる目標探さねば急かされること家事こなす日々
二人居て三度の食事持えるは幸せだけどかなり疲れる
人けなき夕暮れの道の独り言荒ぶる風に吹き曝される
寒緩む光のなかにお隣りの梅満開となる二月尽

山下雅子 七五三参り

・習

秋明菊数りん匂うひとむらにそこはかとなく秋はただよう
七五三を祝う佳き日産土へ小春日和のひかりあまねし
六人の子供伴う孫夫婦にそれとなく洗き併まいあり
帯どきの四女と着袴の長男はみじろぎもせず御祓いを受く
中學生の姉を見上ぐる妹弟のまなざしによき長幼序あり
母の縫い日のこる祝衣六十余年守られひ孫九人の着納む
よちよちの次男の袴もよろしくと 神のみぞ知る三年後のわれに

山野幸司 朝

・沖

朝の窓うたた向きたる梅の木にメジロの動く春日の前に
冴え返る庭にあるる子どもらの雪積み上ぐるうす墨色に
春を呼ぶ小鳥の声に自覚めいしうつろごころに布団にもぐる
孫を連れ伸びやか歩く君の春遠山仰ぐ夕陽を背に
おおらかに子どもの声に応じる妻は黙々夕飯を盛る
玄関に帰り来たれる母の声子らは駆け行く玩具を残し
孫と手を鼻歌歌う田んぼ道さつと飛び立つ鴨は北へと

山本孟 急ぐ

・大

山麓の都市を列車はつらぬきて「生けり」発露の歌会へ急ぐ
星くづの見えぬ大阪一つ星帰りを急ぐわれをみちびく
若き日は予定の埋まる楽しさも九十九路は先先予定あやぶむ
誕生日祝ひくれたる子を生みし妻の空席晩餐始む
つれ合ひのつひに逝きし日独り身に溢れ出づるを短歌にて受く
婿にはさびしく孤独の意味ふくむ 踵は目より涙垂れたり
ロシア軍やりはうだいのウクライナNATOは攻撃せずに耐へる

養学登志子 空ばかり

・凌

青空を一直線の飛行機雲はつかなす彩春くるしらべ
空ばかり見ていし暮しもしかして風呂敷包みの中かもしぬ
湯気たたせ一汁一菜折敷置き三度の食事炬燵にするわ
朝光げの風花雲母をまといつつ地に着けるとき白き灰色
振り向くも右の手袋また失せぬ雑踏の中ふまれいるやも
捨てるには難き左の手袋を棚の角にいくつ重ねる
くさり編みの長さみながら幼き日祖母の繋げる赤い手袋

横田敏子 三月

・福

仰ぎ見る桜の苔まだ固し 3・11の記憶薄れゆく

ドラマに観し南海トラフの巨大地震襲い来る日は明日やも知れず
原子炉の再稼働へのスイッチは押された 岸田政権の下
五十年、百年先のことは知らず爆ぜし原発の廃炉は進まず
人間は手に負えぬもの造りたり手に負えざれば自滅するのみ
人が壊し自然が壊していく地球 青き星ありしと語り種となるや
歳古れば原発事故のことさえも忘れてしまう詠まん今こそ

久我田鶴子 サルマタケ

・羊

風邪ひいたタツさんのためりんご抱き家内さまよふ母なるものは
西浦のみかんが届くる元気なり老いを言ふにものこか弾みて

ともあれ 暖かくなるを待ちながら今日の流しに菜つば洗はむ
目ばかりでマスクの下にも口はないもれでる息に眼鏡がくもる
押入れを開けると不精があふれいで「男おいどん」サルマタケ食ふ
サルマタケ食ひしをいふはちばてつや松本零士の死を悼みつつ
おとうとの手から奪ひて読みし日の松本零士や「男おいどん」

シリーズ「第一歌集を読む」

四月号から始まったシリーズ「第一歌集を読む」は、現
在会員の方の第一歌集（ただし、70周年記念号の作歌論で
取り上げた方は除く）を対象としています。

昨年の十一月号で平成十一年以前に発行された対象となる
第一歌集を紹介しましたが、その中から昭和十九年生まれ
までの方の歌集を優先して始めることにしました。

このシリーズの担当は関根和美です。執筆依頼された歌
集が手元にない場合には、本社に保管している歌集を貸し
出します。対象歌集を初めて読む、その新鮮な感覚を大切
にして、作品との出会い、作者との出会いを楽しんでくだ
さい。

編集部では、この企画がやがて作歌論にも繋がっていく
ことを大いに期待しています。

〔編集部〕

◆第一期・対象歌集と執筆者（執筆者候補）

・河野繁子歌集『雁来紅のうた』

柴田登志恵

・八乙女由朗歌集『阿武隈川』

三好聖三

・中島義雄歌集『銀霜日記』

石田明彦

・市原志郎歌集『ひよどりの風景』

もとむらしげと

・田土成彦歌集『遠隔会話』

阿藤たつる

・ばかりょうこ歌集『星を釣る女』

西堤啓子

・虎谷信子歌集『葛家のうた』

丸山修

・市野千鶴子歌集『あわき茜』

藤田しん子

・菊地栄子歌集『山川みどり』

（高橋啓子）

・白子れい歌集『疏水のほとり』

（仲西正子）

・小西美智子歌集『はなかつみ』

（大寺智子）

・浜本美美歌集『夢の川』

（光広祥子）

◆第二期以降の対象歌集（予定）

・田土才恵歌集『かざぐるま』・牧 雄彦歌集『誰もるぬ部屋』

・辻 彌生歌集『霧しうすまく』・中島央子歌集『桃李』

・近藤良子（芳仙）歌集『花籠』・朝井恭子歌集『風韻』

・橋本曠子歌集『いくとせを』・山下雅子歌集『陽光』

・田村利子歌集『霧の網帳』・小野雅子歌集『花筐』

・中村博子歌集『流れ逝くもの』・鈴木文子歌集『西窓の彼方』

・船田清子歌集『藍の時』・鈴木結志歌集『不易流行』

・坂出裕子歌集『日高川水游』・三浦好博歌集『水の辺のうた』

・篠原まり子歌集『ひとりの春』・小宮山玉江歌集『冬の林檎』

・今村叶子歌集『カデンツア』
以下、続く予定です。

見て・聞いて・話して 関根 正明

私の人生

解放の続くウクライナ暗闇に冷ややかな目のロシア協力者
解放のヘルソン市民幸せで体震えるも苦難は続く

大義なきブーチンによる侵略はロシアへの憎悪刻み込まれる
初めてのグランドゴルフシニアらに我が声交じり潮風に乗る
学食にランチを食べる高齢の私もスーツで教授に見えん
禁煙を志しては歌一首成りたる毎に安堵の一服

すやすやと太腿の上で眠る猫温もりと鼓動血が通つてゐる
フロントにスーツ姿よドヤ街の西成の街コロナ禍で変わる
溢れいる法被姿の天理市をリュックの我是ラーメン屋探す
雨しぶく三輪の平第寺縁台に悟りの顔の寺猫「ハート」

振り返りふりかえりつつ野良猫はジオパークの森自分の住処へ
餌やりに訪れる人数多ありふくら野良猫警戒緩めず

広報の「ちょうし」に載りし猫の歌我の短歌の第一歩なり

私は今年二月で古希を迎えました。古希でも特別の感慨はなく、退職して、もう十年も経ってしまったのかとの思いと、男性の平均健康寿命七十三歳に後三年しか残っていない、この三年間を後顧の憂いなく過ごしたいと思います。具体的には、①終活の準備②短歌の上達③グランドゴルフの上達④友人と交流⑤妻子孫との交流⑥毎日を元気に明るく過ごす等。銚子に生まれ、地元の醤油会社に三十八年間勤め、その間職務は営業庶務の人間相手でした。それが一変したのは、五十歳で経理に異動した時です。PCはワードを少々でエクセルでは表づくり程度、とても経理計算に必要な数式など夢また夢で、異動後三ヶ月はほぼ半徹夜状態でした。メール、ファックス、電話で追い回される毎日で、唯一の逃げ場は、年三回発売されるJRの青春十八切符で連絡の取れない遠方に行くことでした。特に大阪の西成（金ヶ崎）に相性が合ったのか、どっぷり浸かり、ここを定宿にし、主に奈良を歩きました。万葉集に歌われた「天の香久山」はこれで山なんか丘ではないかと思つたりしました。今春は万葉集持参で「山の辺の道」へ三度目の挑戦をする予定です。

予定表

森田 泰子

歌に惹かれて

タグ付いたスースが下がるクロゼットコロナ続いた夏はゆきたり
 青空にみるみる増える雨雲のぼつりぼつりは地面に大雨
 メールでは声が聞こえず寂しいとスマホ握って長ーい電話
 贅沢日名付けた友と寿司店へ食レポもする忙しき口
 ひたる湯にぶかりぶかりとゆず浮かべ両手にすくい香り吸い込む
 晴天が続く師走に人の波前に後ろに潜むかコロナ
 年間の暦につける予定表大文字記入の「金毘羅参り」
 家事終えて心整うこの時間メモ帳ひらく三十日の夜に
 さしみ添え亡夫に供える今年米美味しいと言つて笑顔あらわる
 歌を詠み遺影の背子に音読す乾杯ワインはグラスが二つ
 手作りをすべて旨いと褒める子等電子マネーで渡す年玉
 老いる身とコロナ問題さけられず五回目接種しずかに受ける
 目も耳もそれなりですと言いあぐむひが耳進み知るエージング

「銀(しろがね)も金(くがね)も玉(よし)も
 何せむにまされる宝宝にしかめやも」万葉
 集にある山上憶良の歌です。幼い者への慈
 愛に、人間愛に満ちた歌だと思いました。
 歌はその人の生活、その人の心が全て現れ
 ると教えられています。この歌は言葉その
 もので、何のテクニックもありません。子
 を思う心それが言葉になつていてると思いま
 した。百人一首に「今来むと言ひしばかり
 に長月の有明の月を待ち出でつるかな」素
 性法師の歌があります。これは代詠と言つ
 て男性が女性の立場に立つて詠んだ歌だそ
 うです。この歌を読んだ時は、え?と思ひ
 ましたが、それもありかと短歌が面白くな
 りました。昨年八十路を迎えた私はこれか
 らの余生を考えるようになりました。そん
 な時ふと友から教えてもらった国文学者で
 歌人の長沢美津先生の歌を思い出しました。
 「手を休め心を休めひとときを無心になり
 てまた立ち上る」「年ぶりでいくつになり
 ても自らの楽しみ心捨ててはならず」この
 歌に出会つてとても感動しました。考え方
 を変えると楽しい余生が送れると思いま
 した。これからも読んだ方に共感して頂ける
 ような歌を詠みたいと思っております。

◆今月の二人・関根正明作品評◆

煙草と猫と……

関根さんは、銚子市在住。古稀を迎えて、いくつかやりたいことがあるようだが、そのうちの一つが短歌の上達と言う。

初めてのグランドゴルフシニアに我が声交じり潮風に乗るグランドゴルフの上達もやりたいことの一つ。「シニアら」というのは、自分よりも少し年上の人たちか。初めて仲間入りしたときの喜びが「潮風に乗る」によく現れている。

・禁煙を志しては歌一首成りたる毎に安堵の一服

これでは、ちっとも禁煙にならない。でも、一首できあがつたあとの一服は何とも言えないものなんだろう。この一連十三首にも十三服の至福のときがあつた?

・すやすやと太腿の上で眠る猫温もりと鼓動血が通つて

猫好きでもあるらしい関根さん。太腿の上ですやすやとは、猫の方も関根さんのことを信頼しきっているようだ。太腿に伝わる猫の「温もりと鼓動」。その、生きている証し。「血が通つてゐる」は、ストレートな実感である。

・溢れいる法被姿の天理市をリュックの我はラーメン屋探す

天理市は天理教の町だから、法被姿の人で溢れている。そこへやってきたリュック姿の関根さん。これから山の辺の道を歩こうというのだろうか。そして、その前に腹ごしらえをとラーメン屋を探すのであった。

・広報の「ちょうどし」に載りし猫の歌我の短歌の第一歩なり

短歌の第一歩が猫の歌。銚子市の広報に掲載された一首からであったという。猫の歌から始まつたとあっては、ますます猫を可愛がらずにはいられませんね。

◆今月の二人・森田泰子作品評◆

食レポに金毘羅参り

評者・久我田鶴子

森田さんは、埼玉県上尾市在住。八十路を迎えて、長沢美津の歌「自らの楽しみ心捨ててはならず」に感動したと言う。メールでは声が聞こえず寂しいとスマホ握つて長ーい電話の相手は分からぬが、直接会うことが難しい中で、せめて声くらい直接聞きたいと長電話になつたのだろう。「長い」と表現された電話は、はたしてどのくらいの長さに?

・贊沢日名付けた友と寿司店へ食レポもする忙しき口

たまには贊沢をする日、それを「贊沢日」と名付けた友。その友と寿司店へ行き、寿司を食べては食レポまでする。なんと忙しい口だと、と自分たちのすることを笑つてゐるようだ。軽妙なリズムとユーモアに余裕がある。

・年間の暦につける予定表大文字記入の「金毘羅参り」

今年こそは金毘羅参りをするぞと言うのだろう。一年間通しのカレンダーに大きな字で記入する。コロナ禍でこれまで我慢してきたことなのかもしれない。

・手作りをすべて旨いと褒める子等電子マネーで渡す年玉

手作りの料理を褒める一方で、お年玉は電子マネーでという。現代のアンバランス。生活様式が大きく違つてきていることを身近なところから見つめている。

・目も耳もそれなりですと言ひあぐむひが耳進み知るエージング

「目も耳もそれなりです」と言ひかけて、ふと気づく。そう言えば、ひが耳が進んでいたわ、と。加齢を言いつつ、「エーグィング」。内容とは別に、若々しさに目が留まる。

私は、子供の頃本が大好きでした。仏壇の下の戸棚で本を探していた時に、叔母（昭和七年生まれ）の女学校の時の大学ノートを見つけました。表紙の裏に「東海の小島の磯の白浜にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」ときれいな文字が書いてありました。これは何と聞きたかったのですが、悪い事をしたみたいで叔母にたずねる事もしませんでした。

高校三年の時、私は図書委員になり、図書室で本の整理をしたり、本も借りたりしました。その時、石川啄木の歌集を読みびっくりしました。叔母のノートで見た歌が attachment 1 のです。「これだ」と思い、私はノートに好きな歌を書きとめました。卒業後、就職しましたが、祖父が病気になり家に入りました。中学一年の時に母が亡くなり、それ以後、私が家事をやらねばならなかったのです。誰にも言えない淋しさをまぎらすのに、ノートに書きとめた啄木の歌が私の支えでした。

・いのちなき砂のかなしさよさらさらと握れば指のあひだより落つ
・友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ
歌の意味は理解していなかつたけれど、當時は夢中で書きとめました。やがて祖父

が亡くなり、高校卒業の一年後に再就職し、同級生と同じになりました。家と会社の往復で、短歌のことはすっかり忘れていました。
家庭をもち定年退職後、「シニア大学」に入り、クラブ活動は短歌クラブ入りました。そして近藤芳仙先生にめぐり会い、ご指導を受けました。シニアの卒業近くより、先生

生の指導されている「桑の実歌会」に平成二十五年十一月入会しました。
そして、平成二十六年四月「地中海」に入会しました。歌会の先輩方は全員歌の上手な方ばかりで、歌会を楽しみに毎月第二木曜日に、市の中央公民館に通いました。
私も何年か勉強すればきっと上手に歌が詠めると思っていました。

私と短歌との出会い

遠藤 義子

249

強く心に残っています。

その後、歌の上達はおろか前進もない私は近藤先生に「歌が詠めない、壁につきあたついてためです。」と言うと、先生は「あなたの好きな花の歌をたくさん詠みなさい。」とおっしゃいました。

そんな時平成二十九年久我田鶴子編集長に「今月の二人」にのせていただきました。感激し勉強させていただきました。

昨年十月 A 欄に昇格させていただき、緊張し歌づくりに苦戦しています。そのような時にまた久我編集長から「私と短歌との出会い」の依頼を受け、初心にかえり短歌と向き合う事が出来ました。このような機会を与えて下さった事に感謝申し上げます。今年は近藤先生の指導されている六つの歌会の「さざれ石の会 合同歌集」が出版される年、あらためて気が引き締まります。

平成二十八年五月に、第六十四回地中海全国大会（軽井沢大会）がありました。信濃支社の私達数名は、軽井沢駅にお迎えに行き、地中海の旗を持ち、誘導のお手伝いをしました。

初めての全国大会の参加で、緊張しました。

たが、翌日の班別歌会の時には少し慣れて、話も出来、活発に言葉が飛び交うのに驚きました。とてもいい体験をさせていただき、